

保健連絡協議会だより

かなり確実に予防できる

可能性のある「がん」

肺がん

武雄杵島地区医師会 古賀賢二

タバコは肺がんの発症因子

最近、喫煙やアスベスト吸入が肺のがんを発症させるメカニズムに関して、新しい考え方が提唱されました。

2009年7月、岡山大学の中村栄三教授は、「肺内の含鉄タンパク小体に蓄積されるラジウムと微量元素」という論文で、次のような理論を提唱しました。「タバコやアスベスト吸引により肺に鉄分が吸着し、その場で生成されたフェリチンという生化学物質が空気中のラジウムを吸着し、閉じ込め、このラジウムが放射線を放出し続けることにより局所的な体内被曝が間断なく続くことによって遺伝子へのダメージが蓄積し、ひいては肺がんや悪性中皮腫などの悪性腫瘍が発症する」というものです。この理論は

従来因果関係が曖昧ではつきりしなかった「喫煙が肺がんを発症させるメカニズム」を合理的かつ明確に説明するものと考えられます。

喫煙者の耳にはとても痛い話なのでしょうけれど、やはり、タバコは明確に肺がんの発症因子と考えて良さそうです。

タバコは他人も傷つける

同じがんという病気の中でも、肺がんはとても苦痛の大きながんです。徐々に肺を侵し、最後は呼吸が出来なくなって苦しむ抜く病氣です。

各個人が肺がんを予防することは当たり前ですが、他人をがんにしないということも同様以上に大事なことです。確かに、肺がんのリスクを承知の上でタバコを吸うことは本人の自己責任であり、喫煙

者自身が肺がんを発症することとは自業自得の部分がありません。しかし、本人が吸う煙がフィルターを通して有害物質のある程度を濾過しているのに対して、タバコから直接空気中に放出される副流煙はそういう濾過無しに周囲の人間の肺に到達することは当然です。から、喫煙者自身が吸うより更に危険な煙を周囲の人間に吸わせていることとなります。

公共の場で喫煙することには実は意識せずに自分以上に他人も傷つけていることに他ならないということになります。何処からかいつの間にか流れてきて無理やり吸わされるタバコの煙は、タバコとがんの関係が明確になった現在、明らかに「公害」といえます。

2003年、厚生労働省によって健康増進法でもって受動喫煙を防止する法規が成



立したのも当たり前の話です。成立が遅すぎた感さえあるほどです。

喫煙者がきちんと意識する

タバコはマナーです。マナーとは自覚であり倫理です。タバコとは確かに文化の一つでもあり歴史もある嗜好習慣であるため、吸引そのものを禁止するのは一種の人権侵害といえるのですが、分煙で区切られた空間でタバコを楽しむことは未だにきちんと許されているのです。人を法規で縛るより、タバコが肺がんを発症する毒であるということを知り、喫煙者が意識すること、意識していなかった喫煙者にはきちんと意識してもらおうこと、

喫煙者が自分のタバコの煙を非喫煙者である他人に対して強制的に吸わせることは悪である、という明確な自覚を促すことのほうが大事です。こういう情報の共有こそが、悲惨な病氣である肺がんの患者を一人でも少なくする具体的な方法です。

タバコは自他共に害をなす毒物であり、喫煙者は肺がんにならないためにぜひ禁煙しましょう。禁煙できない喫煙者はせめて他人に迷惑をかけるないように自覚的に分煙に協力しましょう。

5月31日は 世界禁煙デー
 ~禁煙週間5/31~6/6~
 世界保健機構(WHO)スローガン
**「女性と子どもを
 たばこの害から守ろう」**
 家庭や職場・地域でも
 「禁煙」についてかんがえてみましょう